

世界の認識を問い直す機会

クワクボリョウタ (Archival Archetyping, IAMAS)

僕が演劇や時間芸術に関してコメントをするというのは非常に僭越ではあるのですが、お話を伺っていて思ったのは、僕が小学生の頃、ドリフターズの番組『8時だョ！全員集合』を観ていた、あの「いま・ここ」性というのは何だったんだろうということ。つまり、テレビはテクノロジーとしては一方向であるし、今あるようなネットワーク、インターネットを通じたいろいろな手段は当然ないなか、生放送というものの対するリアリティというのは当時はあったんだろうと。伊村靖子さんの言葉を借りると、新しいテクノロジーの登場によって、メディアの再配置が起こった後の今、おそらく同じことやってもそれが「いま・ここ」性の高いものとしては受け取れないんだろうなと思うんです。ただ、僕の体験としては、当時「8時にテレビの前にみんな集合する」という状況をつくり出していたことは、今リモートでやろうとしていることのある側面を実現してたのだらうと思いました。つまり、メディアだったり、世の中に対する認識が変わっていけば、必ずしもテクノロジーがなくても、あるものをリアルなものとして感じることはできるんだろうなと思ったんです。

僕自身の、《その下にすむ空のスケッチ》(2021) という小さい作品の話もさせていただきます。関東から北陸にかけて存在している、あるいは定義されている横田空域というのがあります。ここにちょうどコロナ禍が始まった頃、羽田新ルートがスタートして、それを発端にして、横田空域という問題への具体的な興味と、リモートワーク、リモートの生活が続いて、作品においてもその場に居合わせることがどういう意味を持つのかという興味があって、それが例えばオンラインによって達成されるのとは違う手段はないかなと常々思っていたんです。そのふたつの興味と問題意識がある時に、2021年の3月末にIAMASであった「メタ・モ（ニュ）メント」展に向けてつくったのがこの作品です。

スマートフォンで見るARの作品ですが、オンラインというより、僕がヒントにしたのは、例えば花火や富士山、あるいはブルーインパルスの曲芸飛行のようなスペクタクル性で

す。つまり、巨大である、あるいは遠くから見えるということ。いわゆるリモートのオンラインのコミュニケーションではなくて、遠くにあるけど見えるものというのが使えないかみたいなことを思っていたんです。

横田空域に関しては、まずそれがすごく巨大なので、実際に自分の視点からどのように見えるかが僕にはなかなか想像できなくて、実際に一人称の視点でどう見えるのかという、可視化への興味がありました。また、それが見える、どう見えるかだけではなく、そこに本当に存在していると感じるにはどうしたらいいんだろうかと思ったんです。というのは、リモートというのは、人が離れててもそこに人がいるということを理解できるということです。人間の持つ性質、認識能力をベースにしているんだと思いますが、やはり富士山があそこにあるということは、誰も実感として、あるいは信念として持っているのに対して、横田空域に関してはどうかと考えた。そこで、ARによって可視化するとともに、それをTwitterに上げてもらうことで、それぞれの人がそれぞれの視点から見たものを寄せ集めて、さらにその集積を見ることでその存在というのを確定して、実感していく、信じていくようなことを実現するのがこのプロジェクトの概要です。

先ほどの岩城京子さんの発表を、僕は近視的と遠視的ということが共存していくことが批評性を担保するので重要なのだ、というふうに理解したんですが、こちら辺のことが僕のプロジェクトにも関係しているのかなと思いました。例えば今、地球平面説などといった話が生じるプロセスには、おそらくこういったものと、他の人の見たものの寄せ集めということに対して、どのぐらい信頼を置けるような世界だと認識しているかというようなことが関わってくるのかなと思いました。なので、今回の話を聞くと、単純に演劇なり時間芸術というものの存続に関わる問題というよりは、やはりそれが世の中、世界をどのように認識するかということのベースになる、どのようなベースが重要なのかというような、そういう問題提起だと受け取りました。